

本セッションでは、「現代思想と政治—<統治されざるもの>の脱構成／脱構築」と題して統治の不確実性の高まりと統治の強化という世界的な潮流を念頭に、フランスの現代思想を牽引するC・マラブーが提示する「統治されざるもの (le non-gouvernable)」、すなわち対立の外部に位置付けられる概念と、脱構成 (destitution) ／脱構築 (deconstruction) という概念に着目し、現代思想が政治状況にいかに関与できるか、を模索する研究報告および議論が行われた。まず長島報告「脱構成は、いま？—見取り図を描く」では、ジョルジョ・アガンベンの脱構成論が整理され、脱構成の意義と内実の検討が行われた。脱構成は、権力の篡奪や新たな権力の樹立を志向する構成的権力や、暴力の縮減を志向する脱構築とは異なり、権力関係そのものの停止・解体を通じて、統治不可能な生の形式を追求することが指摘された。2001年のアルゼンチンの政治的危機を背景とする、コレクティボ・シトゥアシオネスによる「政治的代表制の解任」の闘争や、フランスの思想家集団の不可視化委員会のテキストを通じて、革命ではなく脱出こそが、脱構成に固有の身振りであり、脱構成が制度的・政治的秩序の「停止」を求め、再制度化を拒絶する点が強調された。さらに構成的権力論の祖とされるエマニュエル・ジョゼフ・シエスと、その影響を受けたカール・シュミットの思想が、多くの思想家による峻別に関わらず、常に政治的主体の外部を作ることによって構成的権力が生成されるという点において共通していることが指摘された。アガンベンは、人民にせよ、国民にせよ、市民にせよ、政治的主体の統一性を前提とし、換言すれば、政治的主体たり得ない要素に対する構成的排除を前提とする構成的権力論に問題を見出し、それに対抗する脱構成を擁護することが明確化された。最後に脱構成論の非制度的な性質が指摘され、脱構成と制度化の関係について問題提起が行われた。次の横田報告「身体言語を手放さないために—エクリチュール・フェミニンとプレシアドに見られる言語実践」では、ポリティカル・コレクトネスによる統治とも呼ぶべき言語状況を念頭に、エレヌ・シクスーたちの「エクリチュール・フェミニン」と呼ばれる言語実践や、ポール・B・プレシアドの哲学実践に着目し、フランス現代思想の「言葉遊び」が現状にいかなる介入が可能か、について報告が行われた。横田はポリティカル・コレクトネスの広まりを一方では評価しつつも、それによって用語の細分化や新語への移行(例えば性転換→性別移行)により、言語が「一」の体制に閉止することに警鐘を鳴らす。シクスーは、公的な言語システムに訴えるだけでは私自身を語ることは不可能であり、公的かつ制度化された言語の内部に身を置きつつも、制度化から逃れる言語を模索し、自らの身体を制度的ではない仕方で編みなおすことを主張していることが指摘された。こうした実践は新たな言語システムの構築を志向するものではなく、プレシアドによれば、制度的なものとは別な想像力やポエジーによる書き込みこそが、新たな身体や現実を生み出すとされる。こうした言語の「発明」は、制度化に絡めとられない仕方で存在する「私」の言語と身体が存在を明らかにするものであり、「身体集成」として身体がとらえ直される。そして制度化された言語にとらわれることなく、経験から乖

離しない身体言語を手放さないこと。明言しえない「X」を抱えていることの重要性と可能性が論じられた。最後に、マラブーの〈統治されざるもの〉—統治でも、統治不可能な抗う者でもない—と「X」の類似性の指摘が行われた。二人の報告に対して、伊藤会員から討論がなされ、「政治」と「政治的なもの」（前者を条件づけるもの）の関係を念頭に、脱構築思想における汚染の論理（二つの項は独立しては存在し得ず、前者は後者により条件づけられるが、後者は前者なしには成立しない）の問題点（制度外からの異議申し立てによる改良主義の限界）が指摘され、長島報告に対しては脱構成による脱出は政治から逃れることができるのか。また横田報告における同一性から逃れる「X」をどのように名指すべきか、質問がなされた。また両名に共通する質問として「外部は否定によってしか語れないのか」という質問がなされた。フロアからは、アガンベンの脱構成論のアクチュアリティや、エクリチュール・フェミニンの限界と可能性についての質問が相次ぎ、時間を超過しての活発な議論がなされた（時間超過の責は世話人たる山崎にある）。終了後にも、報告者や討論者と、フロアの会員間での議論が尽きないなど、現代思想と政治の関係性に多くの参加者が強い関心を抱いていることが伺え、脱構成やエクリチュール・フェミニンといった概念・実践を通じ、統治の在り方を再考する機会を得ることができた。（報告：山崎望）